

初発の感想からの読みの変容

—今昔物語集の授業(1)「馬盗人」—

金子 直樹

中学校古典で、「多読」と「感想を書き、相互に読み合う」活動を取り入れた授業をおこなった。一般的な読解授業の展開とは異なるものであるが、多読する教材の重ね合わせ方や、感想の取り上げ方などの工夫次第では、クラスの読みが変化・深化し、また、「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」にもつながるものである。

1. はじめに—授業の概要—

2013年度中学3年生では、週1時間扱いで年間を通して「今昔物語集を読む」授業を実施した。実授業時間は年間30時間で、扱った章段は以下の通り。(実施順に、巻数-話数「表題」)

- 25-12「源頼信朝臣男頼義、馬盗人を射殺すこと」
- 23-14「左衛門尉平致経、明尊僧正を送ること」
- 25-10「頼信の言に依りて平貞道、人の頭を切ること」
- 25-11「藤原親孝、盗人のために質に捕らへられ頼信の言に依りて免すこと」
- 28-42「兵立ちける者、我が影を見て怖れを成すこと」
- 28-1「近衛舍人ども、稲荷に詣でて重方女に会ふこと」
- 23-24「相撲人大井光遠が妹、強力のこと」
- 23-19「比叡山の実因僧都の強力のこと」
- 23-20「広沢の寛朝僧正の強力のこと」
- 25-7「藤原保昌朝臣、盗人の袴垂に会ふこと」
- 29-19「袴垂、関山にて虚死をして人を殺すこと」
- 29-20「明法博士善澄、強盗に殺さるること」
- 29-21「紀伊国の晴澄、盗人に会ふこと」
- 28-16「阿蘇史、盗人に会ひて謀りて遁ること」

(※2学期末に、ここまで)

- 24-47「伊勢御息所、幼き時和歌を詠むこと」
- 24-48「三河守大江定基、送り来りて和歌を詠むこと」
- 24-51「大江匡衡の妻赤染、和歌を詠むこと」
- 24-55「大隅国の郡司、和歌を詠むこと」
- 30-10「下野国に住みて、妻を去りて後返り棲むこと」
- 30-12「丹波国に棲む者の妻、和歌を詠むこと」
- 30-5「身貧しき男の去りたる妻、摂津守の妻になりたること」

(※24-47以降の歌説話は、「今昔物語集を読むII」として3学期に実施)

生徒に対して年度当初に示した学習目標は、

- ・数多くのお話を読んで、古典の世界を広める
 - ・友達の見解も参考にして、古典の世界を深める
- の二点である。

中学校における古典の指導は、もとより「親しむ」ことが目的である。今回の授業では、文法を活用して精緻に読むという高等学校授業の簡略版ではなく、全く違うスタイルでの授業を試みた。読解については、口語訳を積極的に利用して、精読よりも多読で「お話の型になじむ」ことをめざした。また、短文でも毎時感想を書かせ、次時にはそれをクラス全体にフィードバックすることで、他者の意見を踏まえてさらに読みを深めることをめざした。

教材は、本文プリント(原文のみ)と、口語訳と簡単な語注を記した「言葉の整理」プリントの2枚を用意し、授業の最初に配布した。授業の展開としては、

①教師が本文を音読して、生徒は本文を黙読する。(初見の古文をどの程度理解できるか、各自試みる。)

②教師が二回目の本文音読をして、生徒は口語訳を黙読する。(耳で聞く古文と目で見る口語訳とを頭の中で同調して理解する。)

③教師と生徒で本文を斉読する。(意味を考えながら音読する。)

この①②③の読みの後に感想を書くまでで1時間、2時間目には生徒全員分の感想をプリントにしたものを読んでまとめる(それで終わり)ということの基本形とした。

本授業は、発問をしながら場面を確認し、板書を用いて人物関係をまとめるという、所謂「古典読解の授業」ではない。生徒の活動は、文字通り「本文を読んで」「感想を書いて」「友達感想を読む」の繰り返しだけである。テキストの経験値を重ねてゆく中で、また、自分とは異なる読みも参考にすることで、読みを深めてゆくことをめざしての試みである。

以下、年度当初に扱った4章段(巻25第12、巻23第14、巻25第10、巻25第11)の実践内容を報告する。

2. 「馬盗人」から

「馬盗人」は難しい教材である。勃興する武士階級の力強さや凄さは、時代の転換点に立たされた守旧派『今

昔物語集』の目には暗く複雑なものとして映っているのだが、後世の視点から次代にさきがけた英雄像として捉えれば、むしろ明るく単純な話となってしまう。

あるクラスでの初発の感想（1時間目）を、以下に抜粋して紹介する。（「最初の感想，印象を述べよ」に対する記述。「／」以下は「物語の構成や表現の工夫について」の記述。下線は引用者による。）

A 「すごい，カッコいい」系

- 武士の「慎み」と「信念」がカッコよかった。頼信と頼義の以心伝心がよかった。／盗人を追いかけるシーンで，親は子を信じ，子は親を習う所があるが，それは日本人が忘れてはならない関係なので，筆者はあえてあのシーンで頼信と頼義の言葉を並べたと思う。
- 僕はこの話を読んで，親子の息がピッタリすぎてびっくりした。お互いに「親はこうしているだろう」「息子はこうしているだろう」と考えながら，しかも盗人の場所もお互いの場所も分からないのに，みごと射た。これは本当にすごいと思った。その他にも頼信は頼義の言いたいことが分かっているなど，すごい人間だと感じた。／「～とは言わずに」，「～と言っているうちに」など，その登場人物がここまで予想してこんな行動をしているという「すごさ」を強調，読者に伝わりやすくしている。
- 私はこの物語を読んで，やっぱり親子って分かり合っているんだなと思った。頼信は最初「など久しくは見えざりつるぞ」とか「速やかにとれ」などと，少しぶっきらぼうに息子を扱っているように思えたが，盗人が馬を盗んだ時，頼信は「我が子必ず追ひて来らむ」と思い，頼義は「我が親は必ず追ひて先におはしぬらむ」と思っており，実際にそうだった。馬を引き出す時も，盗まれそうになったことは一つも口に出さず，すばらしい鞍をついでにあげたのが，武士の親子という感じで，愛情を感じる事ができた。
- はじめは，よく意味が分からず頼信が頼義によい馬を渡したくないために，盗人に盗まれた時一人でいって自分のものとして手元においておく，という二人の仲があまりよくない話かと思っていた。しかしよく話を読むと，お互い馬を取り返す時，（もう一方が）必ず来ると考え，息の合ったプレーだったので，おどろいた。また翌朝何もタベのことは口に出さない所に興味がわいた。自慢などしなかった理由はまだ読み取れないが，とてもカッコいいと思った。／言っていない考えや思いを詳しく述べることで，二人の息が合っている様子や，勘の鋭いことが読み取れた。
- 親子愛の話だと思いました。特に，馬盗人を追いかけるシーン。頼信は頼義が追いかけてくると確信して

いるし，頼義も頼信が先に追いかけていると信じていました。親子との以心伝心や思いやりがよく感じ取れる作品でした。／頼信と頼義の動きを対比する構成になっている。例「親は～。子は～。」「頼信～けり。頼義も～けり。」→親と子が似ていることを強調している！

- 親子の良い関係が描かれているな，と思った。子の功績を陰で喜び，そっと評価してあげる優しい親。武士の奇妙な心構え，と書いてあったが，奇妙ではあるが良い関係を築いていくことができるものなのかな，と思った。また，このような武士に本当の姿を描いた話はあまり読んだことがなかったので興味深かった。／奇妙な心構えというものをより読者に伝わりやすくするために，親と子の行動や心情が対比されて描かれていた。
- 私はこの親子がうらやましいなあと思いました。頼信と頼義，お互いに話さなくても気持ちが伝わるだなんて，さすが親子の力はすごいなあと感じました。ただ，私は，頼義は息子に一切上手に射当てたなあなどとほめなかったことに，疑問を持ちました。この話で改めて親子の絆を感じました。／この話は，第三者が語っています。第三者は，どのような気持ちで書かれたのかと疑問を持ちました。

B 「ちょっとへん，よくわからない」系

- この親子はなぜこんなに口数が少ないのだろうと思った。最後の二文の意味がわからない。
- 私がこの文章を読んで最初に思ったことは，武士って変なプライドを持っているなということです。馬盗人を射殺した頼義を普通にほめるのではなく，遠回しにほうびをあげていたので，普通にほめてあげてほしいのと思いました。なぜ頼信が普通にほめなかったを知りたいです。また，最後に書いてある武士の心構えの具体的な内容を知りたいです。
- 最初はよく分からなかった。でも，口語訳を読んで「頼義はなぜ盗人が馬を盗むことを分かっていたのだろう」と思った。また，最後の方でも，頼信は頼義が後を追って来るのを分かっていたし，頼義は頼信が先に追っていることが分かっていた。その点が少し現実離れしていてこの文章にあまり親近感を持ってない。
- 第一にあまりに親子間の会話が少なく，と思った。ほぼ全ての場面で相手の思っていることを予想して行動しているのである。時代の影響なのかもしれないが，私は少しさびしいなと思う。／文章中に「～であろう」や「～なのだろうか」といった表現が多くある。このようなどころから，筆者が第三者の目線で見ているのが分かる。またどこか突き放したような印象を受ける。

生徒感想のA系は、「信頼」「以心伝心」「息が合う(びったり)」などの共通するキーワードで、頼信親子の行動を共感的肯定的に捉えたもの。各クラスともそれぞれ30名程度の人数で圧倒的に多い。また、その内訳としては、「武士」のあり方よりも「親子」関係の良さへの言及したものが多し。

B系は、各クラスとも10名前後で少数派であるが、その内には「もの言わぬ武士の不気味さ」ではなく、A系の裏返しとしての「子をほめない親への不審」も含まれている。

中学生が手持ちの概念だけで読めば、『馬盗人』は武士のスカッとする活躍をかつよく述べた話だとか、親子のぶっきらぼうな愛情を述べた話だという読みが多くなるのも当然のことであろう。ただし、それで終わるのではなく、他者の意見を参考にすることによって、表現の特徴・繰り返しの効果に気づいたり、新たな気付き・疑問点を見つけて、読みを深めてゆく契機にしなければならない。

2時間目は、前半(25分)で出席番号順に全員分の感想をプリントしたものを読み、後半(25分)で以下のようなまとめを行った。

①自分と同じ意見・違う意見について、それぞれの根拠や論点を整理する(感想プリントに線を引く)。

②A系にもB系にも共通している、「表現」への言及から、「思ひて」、「告げずして」・「知らぬに」などの作者による補足部分を確認する(本文プリントの該当箇所を線を引く)。この対応・繰り返しが何を表しているのかを考える。

③A系にもB系にも共通している、「奇妙な心構え」とは何かという疑問を解決するために、『古典基礎語辞典』(2011, 角川学芸出版)から「あやし」の項目をプリントにしたものを読む。

3. 「平致経, 明尊僧正を送ること」から

巻23第14「左衛門尉平致経, 明尊僧正を送ること」この章段の要点は

○この物語を頭の中で絵にしてみると、とてもおもしろいと思った。二百メートルほど行くごとに郎等が二人ずつ増え、帰りの時は郎等たちは出てきた場所で二人ずつつまり、お屋敷の門に入るときには、最初からいた地位の低い男だけだった。しかし致経がそんなにすごい人なら、郎等たちは最初から最後までお任せすればいいのではないかな。少し疑問だ。

という感想に尽きる。しかし、このような「おもしろい」と評語でまとめた感想例は極めて少数で、各クラスともほとんどの生徒に「疑問だ」「不思議だ」「よく分からな

い」というキーワードが共通している。これは、「馬盗人」との話柄の違いによるものであろう。

しかし、「よく分からない話だ」という一方で、生徒たちの多くは初発の感想から「あやし」「あさまし」という形容詞の繰り返しに注目し、それが明尊僧正の視点からの平致経への評価として用いられていることを正しく読み取っている。また、説話の語りの構造に注目して「馬盗人」と重ね合わせて読むこともできている。これは、前時の授業「馬盗人」での感想のまとめを応用できた成果の表れである。

(「最初の感想, 印象を述べよ」に対する記述。「/」以下は「物語の構成や表現の工夫について」の記述。下線は引用者による。)

○道中、致経を見て、武士たちが従うほどだから、致経はよほどの名手だったのかな? / 「奇妙な…」や「不思議な…」といった類の言葉が多く書かれていて、致経と郎等たちの行動の奇妙さを表そうとしていたのかなと思った。

○僧都が思っていたようにただただ致経がふしぎで奇妙な人だと思った。なぜ黒っぽい衣装を着た者がある地点から護衛に同行させ、帰ってくる時には護衛に加わった地点で帰らせるのか不思議だった。馬でも護衛でも最初から加えれば良いのに。/ 僧都の、不思議・奇妙だと思っていることを細かく書いて、読み手に共感させようとしていると思う。

○致経の郎等たちはなぜ最初から致経に付き従わず、順番に出てきたのか疑問に思う。/ 僧都の致経に対する気持ちを何度も書くことで、致経が僧都にとっても不思議な人物であることを表そうとしている。

○致経がすごい話に殿が食いつかなかったのはなぜだろう。致経の警護はどういう仕組みなんだろう。なんで普通の警護ではなく、こんなこった警護をしたのだろう。/ ところどころに僧正の「不思議だなあ」というのがよく出てきた。致経の警護を長めに書いてある。→どれほど奇妙かを伝えたい?

○はじめ古文だけ読んだときは、前の物語より全く分からなかった。正直、口語訳を読んでもあまり分からないが、はじめに思ったのは「致経は何者なんだ」ということである。護衛役には出ているが、地位の低い下男を一人従えている、と書いて、そんなたいした人じゃないのかなと思ったが、二町ごとに黒っぽい装束を着た者がやってきて、馬に乗ったり、みんなついてきたりと、人望が厚い、ではないが、なんだかただ者ではないのかなと思った。考えてはみたが、結局分からなくなった。/ 僧都が致経に対して「不思議」と思っている場面をいくつか書くことで、僧都と致経の立場

の違い(?) みたいなのがわかった。

- 言葉には出さなくても、致経は郎等とうまく物事を進めることができていた。普段から訓練していないと、こんなに上手くはできないと思うし、それを突然の命令でやってのけた致経がすごいと思った。／致経の普段の状態と、第三者の「頼りなさそう」という発言を書くことで、本当の有能、無能ということについては、外見では判断できないということを表そうとしている。何度にもわたって致経と郎等が言葉を発さなかったということを書くことで、当時の武士がどのようなものだったのか表そうとしている。
- 僧都を送る往路で、致経の郎等が二人ずつ現れ、復路では同じ場所で帰って行って面白いなと思った。僧都の言動から、事前に打ち合わせ、訓練したわけではないようなので、不思議だなと思った。／「かねてならはし契りたらむやう」に郎等が現れ帰って行く様子から、前回の馬盗人の話のように、事前の約束をしない「あやし」武士を表しているのではないか。
- 私はこの文章が前回読んだものと似ていると思った。「不思議な武士」というのがどちらの文章にも登場していて、「あやしき者」として扱われている。ただ、私はこの文章の意味があまりよく分からなかった。前回は親子の口数が少なく、「武士が奇妙だ」というのがなんとなく伝わってきたが、この文章の武士たちは「二人ずつ増えたあとに、二人ずつ減った」だけで、確かにこの行動自体は奇妙だが、別に武士が何をしたわけではないので、一体何を伝えたかったのかいまいち分からない。／前回の文章のように「口数が少なくても以心伝心している」といったような凄さはなく、「武士が増えて、減った」という内容しか、武士に対しては書かれていないので、作者が一体どんなことを表現しようとしているのか、すごく伝わりにくい文章だと思う。ただ、武士がほとんど黙っているという点では前回と同じだし、武士が黙って増えたり減ったりするというのはとても奇妙なことなので、やはり武士の不思議さ、奇妙さを表現したかったのではないだろうか。
- 前に読んだ親子の話と同様に、多くを語らなくても通じ合っている以心伝心な武士の様子を書いているのだと思った。そして、その二つの話は両方ともその武士の行動を不思議がるというような描写があることに気づいた。／話の中盤ですべて僧都が武士の行動を不思議がる様子を書いて、最後に僧都が殿にその行動を全て語ったが特に驚きはされなかったという描写を入れることで、武士の行動とは武士同士では暗黙の了解であるが、その他の者には理解しがたい不思議なもの

であるということを強調して伝えている。

- 僕はこの文章を読んで前の文章と共通点があると思いました。それは貴族や僧などの位の高い人が武士を不思議がっているということです。しかし、前回の文では筆者(貴族)が完全に気味悪がっていただけだが、今回は僧が不思議がると同時に、少し感心して殿にその事を伝えようとしている所が違うと思いました。／この文章も前回の文章も、筆者は武士の持つ力というものを出してきました。このことから、筆者は、今は武士は貴族や僧を守る存在でしかないが、これからどんどん台頭してきていずれは武士の世の中になるということを予感したのではないかと思います。
- 私はなぜこのような行動を致経がしたのかよく分からなかった。でも、前の今昔物語のように武士って奇妙な事をするものだなと思った。私にはこの致経の意図は分からないが、自分の力や独創的な発想を見せつけ、僧都の脳裏に焼き付けさせておきたかったのかなと感じた。また、殿が僧都に何も尋ねなかったのも気になった。むしろ、殿はそちらの方も目当てで、僧都に参らせたのではないかなとも思った。／作者は、僧都の目線で書き、僧都たちがいかに武士を気味悪がっているのかを表現している。前に読んだ今昔物語のように僧都が武士って変だねと思っていることを伝えている。
- 致経は一体どんな人物なのか、とても不思議に思ったが、文章中で解き明かされている感じが全くしない。また、前回の「源頼信朝臣男頼義、馬盗人を射殺すこと」と同様、「武士って変だな」という印象を受けた。「口に出さない」ことははたしてかっこいいことなのか、そうではないのか、私にはいまいちよく分からない。頼通の心の内も知りたいと思う。／この物語の中で、そんなに大きな事件が起こっているようには感じられない。致経が僧都を護衛し、僧都が致経を不思議だと思ったが、殿は何も反応しなかったという、それだけの話である。作者は最後の文でもあるように「武士って変な生き物なのに、何で勇猛で特別な人物として取り上げられるの?」と言っているように思う。
- 前の時間まで読んだものと似て、不思議な物語だと思った。武士の不思議な行動がどちらにも描かれていたと思う。普通に生活しては絶対に体験しないような、武士ならではの行動だと思った。／この物語が描かれた時、どんな社会だったのかは分からないが、作者は、貴族から見た武士の姿を表したかったのかな、と思った。物語の終わりに、僧都が致経の不思議さを頼通に語ったが、頼通は何の反応もしめさなかったという場面があった。貴族である頼通は、武士である致

經の行動に何も驚かない。つまり、貴族は武士が何を
したとしても武士に関心は無いということ、あの場
面を挿入することで表したかったのかもしれないと
思った。しかし、社会の情勢が、武士に頼らなければ
生きていくことができないというものであれば、貴族
は武士に干渉せず、信頼していたという表現でもあ
るのかなと思った。

「馬盗人」と同様に、2時間目は前半(25分)で全
員の感想をプリントしたものを読み、後半(25分)で
以下のようなまとめを行った。

①僧都の心情を理解するために、『古典基礎語辞典』
(2011, 角川学芸出版)の「あさまし」の項目をプリ
ントにしたものを読む。

②多くの人に共通している、「表現」への言及から、往
路・帰路それぞれでの「ともかくも言はず」「あさまし」
などの反復を確認し(本文プリントの該当箇所を線を引
く)、何を表しているのかを考える。

③「分からない」「疑問だ」という感想が、この章段
では「分かった」「読めた」ということでの表現である
ことを確認する(感想プリントに線を引く)。

読みが不十分な生徒への配慮として、「平致経」章段
を「馬盗人」章段の応用として読んでいることを明確に
するために、①②③の項目の対応を(扱いは逆順だが)
意識しながら行った。

4. 頼信説話まとめから

上記2「馬盗人」(2時間)、3「平致経、明尊僧正を
送ること」(2時間)をふまえて、
25-10「頼信の言に依りて平貞道、人の頭を切ること」
25-11「藤原親孝、盗人のために質に捕らへられ頼信の
言に依りて免すこと」

二つの章段を通して読み(両章段ともに長いので、今
回は本文を読んで初発の感想を書くのに2時間)、まとめ
とした。

感想は、A「頼信の、こういうところが好きだ・嫌い
だ」、B「作者は、頼信をこういう人物として描いて
いる」二題からの自由選択とした。Aは頼信の言動や出来
事などの叙述内容に即して、Bは文章の構成や評価の仕
方などの表現方法に即してのまとめである。選択の結果
は、各クラスともA 20名強でB 20名弱であった。

A 頼信の、こういうところが好きだ・嫌いだ

○僕は、頼信の頭が良くて武にもたけているところが
好きだ。武士だからよく分からないところもあるが、
盗人を説得したりして、人の心を読んでいるようで

かっこいいと思った。開けっぴろげでいるようで実は
よく考えた上での行動であるところも好きだ。

○僕は頼信はすごいと思う。平貞道に大声で殺しの命
令を出したり、藤原親孝に小童一人くらいは殺させて
しまえなどと言ったり、最初はいつも言動に驚かされ
た。しかし結末は必ず頼信の思った通りになる。彼の
馬鹿げた言動には、信頼や自信などの揺るぎない理由
としての何かが隠されているのだろうか。今昔物語集
を読むうちに、作者が武士を不思議がるのも無理はな
いと思った。

○私は、頼信の物怖じしない威勢のある所が好きです。
特に盗人から人質を取り返すところで、ふつうは、命
をとられるかもしれない時は、弱気になって下から出
るのではないかと思うが、勢いのあるあの姿勢を貫い
ている所が、武士って変だとは少し思うが、かっこい
いと思いました。また、盗人を放し、必要な物を与
えている所で、このような考え方はふつうできないと思
い、すごいと思いました。

○頼信は心の器が大きい、というか、細かいことは気
にしない人なんだな、と思った。巻25第10では、大
声で秘密にすべき内容を言ったり、直の部下ではない
のに大事なことを頼んだり。第11では、子供一人く
らい殺させろと言ったり、盗人を馬付きで逃がしたり。
好き嫌いはどっちにもとれると思う。頼信には、武士
はこんなものという信条があるのかなと思った。

○頼信は、何をやり出すのかよく分からないように見
えるけれど、最初から自分の考えを言っていると思っ
た。そして、それを貫き通しているところがいいと思っ
た。このような人が武士の見本なのだろうと感じた。
実は賢いところも良いと思った。しかし、こちらとし
ては、やる事が最初からはっきりしている方が良い。

○私は頼信の気性が荒い所が嫌いだ。「殺す」「死ぬ」
ということの重さを理解していない時代であり、武士
なんかはもっと理解していないと思う。しかし、親孝
の子を人質にした盗人は殺していない。ただ逃がすだ
けではなく、盗人が生き延びられるように、いろいろ
と持たせてやった。やりたいことが分からなかった。
盗人を殺していたら「武士の典型的な奴だ!」と言
い切ることができるが、私の中では「よく分からない人」
という感じだ。

○私は頼信の武士であることへの異常なまでの自信が
嫌いだ。自分が言うことは全てまかり通っている気
がする。しかし、親孝の話を読んで、「頼信は本当
は優しいのではないか」という思いも生まれた。盗
人に必要な食料や馬まで与え、太っ腹だとは思
う。けれども、簡単に人を殺せと言ってみたりすることには

どうしても納得がいかない。立派な武士というのはどう
いう人のことを言うのか、とても疑問だ。

B 作者は、頼信をこういう人物として描いている

○作者は、頼信のことを武士としての威勢がとてすば
らしいと評価し、武士としての心構えもすばらしい
と言っていて、人々が恐れ入ったなど書いているが、
作者自身にとっては、それらは奇妙なものとして描い
ているのだと思う。

○僕はこの今昔物語集の作者は、頼信を読者から見て
「理解し難い人物」として描いていると思う。最初に
読んだ話は「なぜ口数がこうも少ないのか、作戦を立て
ればいいのに」と思わせ、次の(三)も「なぜ家来で
も無い人に、しかも大勢の中で命令するのか」、その
次の(四)も「なぜ仲良しの子が死んでもいいと言った
のか」と明らかにイメージダウンさせるように描かれ
ている。また頻繁に使うことで「おかしさ」を強調し
ていると思う。

○作者は頼信を威厳のある武士の見本みたいなもの
として書いているのだと思った。頼信は全ての話を通し
て活躍しており、少なくとも頼信を全否定しているよ
うな話はなかった。これより作者は頼信を気に入って
いるのか、それとも武士のモデルとしてちょうど良
かったのか、一体どちらなのだろうと思った。

○作者は、頼信のことを理解できないと言いながらも
武士として立派であるとも書いていると思います。作
者は、頼信と同じ立場の人として頼信は理解できない
と言っているのか、違う立場の人だから理解できない
と言っているのか分かりません。しかし、私も周り
には理解のできないことをしながらも、武士として立派
なことをしている頼信はいいなあと思いました。

○作者は、頼信を武士の手本のような存在として描い
ていると思う。今までに読んだ話の中で、頼信は一見
奇妙な行動をしているが、最終的に私たちは納得したり
、「すごい」と思われる。このような事をする人
が武士なのだ、ということ伝えたいのかな、と思っ
た。決して真似をしるとは言わないが、武士のように
少し違う視点で物事を見てもみるのも良いのかもしれ
ない、と武士の手本を見て感じて欲しいのかもしれない。

○作者は、頼信を武士としては高く評価しているが、
少し受け入れがたく思っていると思う。それは第 12
「あやしき者どもの心ばへ」、第 10「これを聞く人い
よいよ恐ぢてけり」とあるところからも分かる。また
第 11「この頼信が威いとやむごとなし」からは作者
が頼信の「武の威」を高く評価していることが分かる。

○今まで読んだ三つの頼信が出て来るお話の中で、頼

信の目線で描かれ、頼信の心情があらわれているもの
はありませんでした。そのため、やっている行為とし
ては、かっこいい、すごいな、と思うことはあっても、
頼信の人柄がはっきりせず、なぜこんなことをしたの
かななどの多くの疑問がわいてくる人物となっていま
す。そうすることで、頼信（武士）が作者にとっては
よくわからず、不思議だということを表そうとしてい
るのだと思いました。

○頼信は常に少し先を考えられるし、人の気持ちを想像
し、言葉と態度で人を動かすことのできる、恐ろし
いほどすごい奴と描かれている気がした。第 12, 第 10,
第 11 は連続しているが、どれも頼信以外の人の視点
で描かれているし、結局「頼信の人物像はよく分かん
ないけど、なんかすごい」という結論にしかなくなっ
ていないような気がする。超人のような扱いなのだろうか。

A系が過半数ではあるが、その中でも特に「頼信を好
き」とした者の多くが、「～実は…」「普通は～だけど頼
信は…」という屈折のある表現を用いている点が注目さ
れる。「馬盗人」実施時の単純な共感讃美とは異なった
評価となっている。また、B系統で半数近くの生徒が、
説話を読む際に「作者」という視点を取り入れようとし
ている点も、読みの深化の具体的な表れであろう。

5. まとめ

「中学校学習指導要領（第3学年）」には、「伝統的な
言語文化に関する事項」として、

歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親
しむこと。

とあり、またその「解説」には、

「歴史的背景」については、作品の理解に役立つ事柄
を精選して取り上げるようにする。

ともある。

まことにもつともなことであるが、その方法が問題で
ある。「歴史的背景」を「精選して取り上げる」とは、
参考知識を手際よく与えることだけではあるまい。古典
では、登場人物の言動や場面・出来事だけでなく、その
表現・描き方や、主題の設定までもが作品の時代状況と
密接に関わっているので、「歴史的背景」は外から知識
として与えられたものより、テキストの具体から抽出さ
れたものの方がより有効にはたらくと思われる。

また、古典本文だけでなく友人の意見もテキストとし
て「読む・書く」サイクルを作り出すことは、古典への
「親しみ」をいっそう強いものにするはずである。

今回の実践は非常に粗いものであるが、初発感想の書
かせ方・ポイントの整理などの改善を加えて行きたい。